

フォマの主日 聖体礼儀 代わるどころ

トロパリ

トロパリ

ハリストス かみや はかは封ぜられて いのちなるなんじは
墓より ^{かが}輝やき 門は 閉ざされて 衆人の 復活なる
なんじは 門徒の 前に 立ちて なんじの 大いなる憐れみに
よって 彼らを以て 正しき神^oを 我等にあらためさせ たまえり

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

コンタク

ハリストス かみや 門閉じたるに 爾入りしとき
研究をこのむ フォマは手を以て いのちを
ほどこす 爾の 脇を探ぐりて 他の使徒とともに 呼べり
爾は我等の主、および かみなり

ポロキメン 3調

我が主は大いなり その力もまた大いなり その知恵は はかりがたし

(句) 主をほめ揚げよ、蓋し我等の神に歌うは善なり、蓋しこれ楽しきことなり。

聖使徒行実の読み (5 : 12 ~ 20)

謹みて聴くべし

か 彼の日、使徒の手に由りて、民間に、多くの休 徴と奇蹟とは行 はれたり。衆、
 みな 皆、心を一にして、ソロモンの廊に在り。餘の者は、敢て彼等に附かざりき。然れど
 たみ も、民は、彼等を崇めたり。男女の信ずる者、増 多く主に就き、人、病者を衛
 か いだ ゆか とこ そのかげ あるい これ おお
 に昇き出して、床、及び榻に置き、ペトルの過ぎて、其影の或 は之を蔭はんこと
 こいねが いた また おお きんぼう しよゆう や おき うれ
 を 糞 ふに至れり。又、衆くの人、近傍の諸邑より、病める者、及び汚鬼を患ふ
 たずさ
 る者を攜へて、イエエルサリムに集 れり。皆、愈ゆるを得たり。

およ とも いたん ともがら た ねたみ
 司祭長、及び凡そ彼と偕にする者、サッドウケイの異端の 徒 は、起ちて、嫉
 み その お これ ひとや くだ しか よる
 に満てられ、其手を使徒に措きて、之を公獄に下せり。然れども、主の使い、夜、
 ひとや ひら いだ い
 獄の門を啓き、彼等を引き出して日へり、
 ゆ でん こ せいめい ことば ことごと たみ かた
 『往きて、殿に立ち、此の生命の言を悉く民に語れ』。

アリルイヤ 8調

来たりて主に歌い、神我が救いの防固に呼ばん。

(句) 蓋、主は大なる神、大なる王にして諸神にまさる。

福音經の読み イオアン伝 20:19-31

か すなわちなのか はじめ すで もんと あつま ところ もん おそ
 彼の日、即 七日の首の日、既に暮れて、門徒の集れる處の門、イウデヤ人を懼
 るに因りて、閉ぢたるに、イイスス來りて、中に立ちて、彼等に謂ふ、
 なんじら へいあん
 「爾等に平安」。
 これ い おのれ わき よるこ また
 此を言ひて、彼等に、己の手足、及び脅を示せり。門徒、主を見て喜べり。イイスス、復、
 い
 彼等に謂へり、
 なんじら へいあん われ つかわ ごと われ また つかわ
 「爾等に平安。父が我を遣し如く、我も、亦、爾等を遣す」。

これ い
此を言ひて、^き氣を嘘^ふきて、^い彼等に謂^ふ、

せいしん
「^{せいしん}聖神^をを受けよ。爾等、^{そのつみ}人に、^{ゆる}其罪^をを釋^さば、^{すなわち}則^{ゆる}、^{そのつみ}釋^さる。人に、^{とど}其罪^をを留^めば、
^{すなわち}則^{とど}、留^めらる」。

きた じゅうに ひとり
イイススの來^{きた}りし時^{じゅうに}、十二^{ひとり}の一^{ひとり}なる^{ひとり}フオマ、^{しょう}稱^{して}ディディムと云^ふ者^と、^{とも}彼等^と偕^あに在^らざり
き。他の門徒、^い彼に謂^へり、

しゅ
『我等^{しゅ}、主^をを見^たり』。

しか
然^{しか}れども、^{これ}彼は、^い之^に謂^へり、

われ も その くぎ あと わが指^をを釘^のの迹^{を見}ず、^わ我が指^をを釘^のの迹^{に入れ}ず、^わ我が手^をを其^の脅^{に入れ}ずば、
しん
信^ぜざらん』。

ようか こ
八日^をを越^えて、^{また}門徒^と、^{また}復^と、^{うち}内に在^り、^{とも}フオマも^{とも}彼等^と偕^あにせ^り。門^を、閉^ぢたるに、^{きた}イイスス、來^{きた}
りて、^{なか}彼等^{の中}に立^ちて曰^へり、

へいあん
「爾等^{へいあん}に平^安」。

つ
次^つぎて、^いフオマに謂^ふ、

この の わが手^をを視^よ。爾^のの手^をを伸^べて、^わ我が脅^{に入れ}よ。信^ぜざる^{なか}勿^れ。
すなわち
乃^{すなわち}、信^ぜよ」。

い
フオマ、答^へて、^い彼に謂^へり、

しゅ かみ
『我が主^{しゅ}よ、我が神^{かみ}よ』。

い
イイスス、^い彼に謂^ふ、

われ よ
「爾^{われ}は、我^をを見^しに縁^りて信^ぜり、見^ずして信^ずる者^は ^{さいわい}福^{なり}」。

その まえ おい また た
イイススは、其^{その}門徒^のの前^まに於^て、亦^{また}、他^たの多^たくの奇蹟^の、此^この書^{しょ}に載^せざる者^をを^{おこな}行^へり。此^{これ}
の
を載^せたるは、爾等^が、『イイススは、神^のの子^の、ハリストスなり』と信^じ、且^{かつ}信^じて、其^{その}名^をに^よ因^り
て、^{いのち}生命^えを得^ん爲^ためなり。

「常に福」の代わりに「神の使い」

「既に真の光」の代わりに「ハリストス死より・・・」

神の使い

ワラーム修道院のラスペフ

The image shows a musical score for the hymn '神の使い' (The Angel of God). It consists of ten staves of music in a treble clef with a key signature of one sharp (F#). The lyrics are written in Japanese and are aligned with the notes on the staves. The music features a mix of quarter, eighth, and sixteenth notes, with some rests and dynamic markings. The lyrics are as follows:

かみのつか - い 恩 寵 満ち こうむる ものに、
呼びてい えり、 いさぎよき 童 貞 女
よろこべよ、 またいう よろこべよ、
なんじの子 三日 - 目に はかより ふかつし、
死せしものを 起こせり。 ひとびとや
よろこべよ あらたなる イエルサリム
ひかり ひ か - れよ、 主の光 - 栄は
なんじに かがやきたれば なり シオンよ、 いま
いわいて たの しめよ、 なんじ いさぎよき
生 神 女 なんじが 生みし 主の ふかつを
よろこび たま - - - え